

就職活動体験記

経済学部（2020 年卒）

「特に取り柄もない自分が、企業から内定をいただけるのだろうか？」
こんな不安から私の就活は始まった。初めて就活イベントに参加したのは3年生の4月末に学校で開催された就活スタートアップセミナー。「就活が早期化し、内定が早く出る傾向が高まっています。しっかり3月の本番に向けて準備し、内定を勝ち取りましょう！」と自信に満ち溢れた4回生の内定者の言葉に背中が“ぞくっ”とする感覚があった。「来年の今頃、内定をたくさんもらって遊び倒している自分が想像できないなあ、大丈夫かな。」人一倍の心配性な私は、このイベントに参加し、右も左も分からないけど、この1年は一生懸命就活を頑張ろうと決意した。

6月1日、ついにα社（就職情報サイト）が解禁し、インターンという戦いの火蓋が切られた。「大手だとインターンに受からないと内定もらえないらしいよ。」こんな噂が飛び交い、冷や汗。浪人時代の友達とグループ通話をし、「ついに解禁しちゃったね。不安やわー、頑張ろうな。辛くなったらまた電話しよ。」と励まし合った。4人とも大学が違い、会う機会も少ないにも関わらず、やはり1年苦しい時期を乗り越えた仲間の安心感は大きく、あの頃の自分の支えになった。

そしてα社とにらめっこする日々が続いた。とにかく知っている大企業をプレエントリーしまくりに、生協主催の学内説明会にも参加した。だが、自分の行きたい企業が全く分からず、右往左往の日々。サークルの先輩のアドバイスをもらいながら興味のある業界ごとに2つずつ計8つエントリーした。そして初めてエントリーシートを書く時が来た。「私、就活している！」スタートラインに立って不安と高揚感が入り混じっていた。

初めて企業のオフィスに足を運んだのは、A社（エネルギー）のインターン選考会だった。前日からそわそわし、当日の朝は吐きそうだった。慣れないスーツを身にまとい、大雨の中、不安に押しつぶされそうになりながら会場に到着した。来ている就活生の大学名を見ると京大、京大、京大、阪大、同志社、そして私。「なんだこの世界は！」余計に委縮してしまった。部屋の後ろでは社員さんがずらっと並び、パソコンにカタカタと打ち込んでいて、全体的に緊張感があり、「心が持たないから、早く終わってほしい。」と思っていた。グループワークが進む中で1番息詰まったのは「あなたが他者と比べて突出している点は何ですか？」というお題。「えっ、こんなスペック高い人の中で突出しているところなんてある？」周りの人はすぐに発言し始めたものの、私は考え込んでしまった。私が初めて就活中に自分と向き合った瞬間である。何とかその場をしのいだものの、自分の強みについてもっと見つめ直す必要があると思った。

夏インターンはなぜか上記の企業も合格し、7社中4社参加できた。具体的には、5日間のA社、3日間のB社（損保会社）、3日間のC社（シンクタンク）、1日間のD社（電子機器・部品メーカー）である。

夏インターンに参加することで、企業や社風を知ることはもちろんだが、私にとっては「自分

が社会でどんな風に活躍できるのか。」深く考えるきっかけになった。同じようなスーツを身にまわっていても、一人ひとり個性や強みは全く違う。ムードメーカーもいれば、プレゼンが上手な人、ロジカルシンキングができる人など、自分にない要素を持っている人とたくさん出会うことができ、刺激的な日々を過ごした。「場の空気を読みすぎて、積極的に発言することが苦手だった自分を変えたい！」という想いから、自分にはない強みを持っている人から学んでコツを吸収したり、苦手だったプレゼンにも挑戦したりで自分自身が成長する場にすることができた。

また、私は就活生同士や社員さんからのフィードバックをととても大切にした。インターンを通して自分なりに積極的に発言してきたつもりだったが、フィードバックの際に「押しが弱い、もっと発言していこう。」と何度も言われ、心が折れそうになったこともあった。「どこがあかんかったんやろう。」自分の中で悶々と考えても答えは出ないと思い、勇気をもってインターン終了後、A社の人事のリーダーの方に自らフィードバックを求めに行った。弱みを厳しく指摘されると思いきや、「自分の弱みを理解していることは素晴らしいこと、あとは改善あるのみ。逃げずに立ち向かっていこう。」と勇気づけられ、胸が熱くなった。また、「チーム全体を見る視点、まとめる力がとても高く、どんな組織でも balancer として活躍できる。こちらも期待しているよ。」と言われ、素直に嬉しかった。親には「受験に差し支えるから部活を止めなさい。」とよく言われていたが、中高テニス部の部長として培った組織を運営する力、全体最適の視点がビジネスの場でも生かせることに気づき、自分の個性・強みとして大切にしていこうと思った。

また、夏インターンを通して自分が興味のある業界を見つけることもできた。きっかけは、D社のインターンに参加したことだ。「電子部品を使って10年後の社会課題を解決しよう」というテーマだった。他の就活生にとってはごく普通のグループワークだったのかもしれないが、私にとっては電子部品の無限の可能性を感じ、次世代技術で社会を大きく変えられることがとても魅力的だった。「電子部品めっちゃ面白いやん。」これが私のメーカーとの出会いである。

さらに私をメーカー志望に近づけた出来事がある。それはC社のインターンに参加した時のことだ。中小企業診断士の勉強をしていた関係でコンサルに強く興味があったが、インターン中、実力主義の社風が私にはどうも合わないと感じていた。そんな私の心理を見抜いていたのか、3日間のインターン終了後、人事の方から「あなたはグループでの協調性があるから、メーカーとかのビジネススタイルの方が向いているのでは？」とフィードバックを頂いた。この言葉をきっかけに、自信をもって秋以降「メーカー」への就活にシフトすることができた。

「早期選考があるかもしれないし、とりあえずインターンに参加しておこう。」と最初は思っていたものの、企業や仕事内容、社風を知ることに加え、自分と真剣に向き合い、社会で求められる人材力を身につけるきっかけとなった。そして自分の就活の方向性を定めることができ、充実した日々を送ることができた。

インターンは学ぶことが多く、社会人や他の就活生と接することで刺激にもなる。これから就活を始める方には時間の許す限り、自発的にインターンに参加してほしいと思う。

10月はじめ、企業研究の一環として、エネルギーやインフラ関係の合同説明会に参加した。すると夏インターンでお世話になったA社の人事の方を見かけた。「きっと向こうは覚えていないだろうな。」と思いながら、A社のブースに近づいた瞬間、「〇〇さん！」という声が。笑顔で人事

の方が私に声をかけてくれた。100人以上参加しているインターンだったはずなのに私のことを覚えていたことがとても嬉しく、「ちゃんと社会に受け入れてもらえている気がする。」という気持ちになり、自信にもなった。就活イベントが少ない秋の間にしっかり自分と向き合い、今後頑張っていこうという思いが芽生えた。

このイベントの帰りに梅田の紀伊国屋で業界地図を購入し、メーカーの企業研究を始めた。「名前は聞いたことあるけど、何を作っている会社なのだろう。」元々、小さいころから車を見ることが好きだった私にとって、様々なメーカーの商品や社会への影響力を調べていくことがとても楽しく、1か月でキャンパスノート2冊分の業界研究ノートが完成した。良くも悪くも、1つのことにのめり込むと没頭してしまう性格なのである。そのほか、日経新聞を毎日読み、社会の動きを知ったり、興味のあるメーカーの記事があれば切り抜きをしてノートに貼り付けたりした。この業界研究ノートがのちに多くの企業の方から評価され、企業への熱意をアピールきっかけとなった。

また、本を多く読むようになった。その中で特に印象的だったのが落合陽一さんの「日本再興戦略」である。テクノロジーの発展で日本に今後訪れる社会課題を解決することができるのでは、という内容だった。この本をきっかけに様々なメーカーの商品を見的过程中、私は BtoB 企業に魅力を感じた。様々な分野の完成品メーカーと協力しながら、次世代ビジネスを発展させ、これまでと違った視点から社会課題を解決していける点が興味深かったからだ。このような流れで、秋以降は BtoB メーカー中心にインターンに参加し、働きたいと思える企業にたくさん出会えた。

六甲台の紅葉がきれいに色づいていたもののあつという間に散り、12月になった。「年が明けたら一気に就活モードに切り替わるのかな、ついに本番やあ。このままで大丈夫かな。」こんな漠然とした不安を抱える中、就活で定番の質問である「学生時代頑張ったこと」や「自分の強み弱み」について本格的に考える必要があると思った。いわゆる自己分析である。サークルの先輩に相談したところ、六甲台就職相談センターを勧められ、勇気を出して足を踏み出してみた。この一歩の勇気と就職相談センター相談員のYさんとの出会いが私の就活を大きく動かした。

12月から約半年間、毎週木曜日に六甲台就職相談センターに行き、Yさんと面談することが私の日課となった。自己分析の修正や受ける企業の絞り込み、エントリーシートの添削、たわいのない世間話など、たくさん向き合っていた。就活のプロとしての視点から自分を見ていただけたこと、自己分析や今後のスケジュールに関する疑問を逐一解決することで大きな自信になり、私の原動力となった。

1月ごろからは自分の「就活の軸」について向き合った。この「就活の軸」も面接でよく聞かれる題材であり、論理的に相手に志望する理由を伝えることが大きく明暗を分ける。「なぜその業界なのか、その業界の中でもなぜその企業を選ぶのか」多くの就活生が理由付けに苦戦することの1つである。私は「関西を中心に働きたい」「BtoB メーカーのビジネスが面白そう」という思いがあったものの、もっと深く理由付けを考える必要があった。「なんで私こんなにメーカー面白いと思うんやろう？」そんなややもした気持ちを抱きながら、阪急六甲のブックファーストで何気なく手に取ったビジネス雑誌の日経 TRENDY「未来予測」を読んで、自分が抱いていた気持ちを

思い起こすことができた。それはD社のインターンの時に感じた「AI や IoT を使った次世代のビジネスで社会を違う視点から支える」ことの面白さである。例えば、異業種間の連携を通して、コンビニの無人化を実現できることが挙げられる。センサーや RFID タグを使うことでこれらを実現し、コンビニの人材不足を補うことができる。この時感じた「高い技術で社会課題を解決することができるわくわく感」をうまく言語化するのにかなり時間がかかったが、早い段階で「私の就活の軸」を見つけ、受ける企業を 20 社前後に絞り込むことができた。

2 月に入った。冬の寒さに加え、立て続けに入る会社説明会やリクルーター面談で疲れが溜まり、体調が優れない日が多く苦しかった。ジムに通うなど、うまく息抜きをしながら、立て直すことができた。また、2 月には新たな取り組みとして、β 社（就職情報会社）という就活アプリに載っている昨年度のエントリーシート情報を参考に、受ける予定のある企業 20 社の志望動機を作成した。2 月に作成した理由は 2 つある。1 つ目は、1 月に受けた E 社（シンクタンク）というコンサルの本選考でありきたりな志望動機しか用意できず、「なぜ E 社を志望するのか？」という問いに全く答えられず、3 次面接に落ちたからである。志望動機の大切さを痛感し、どんなに詰められても自信をもって答えられる内容を作る必要があると感じた。2 つ目は、志望動機の作成には、多くの時間がかかるからである。入念に企業研究を行い、志望する裏付けとなる理由を作ること、他の就活生と重複しないように、自分らしい志望理由を作ることが大切である。3 月になると会社説明会など、とてつもないスケジュールが押し寄せてくる中で、3 月末のエントリーシート締め切りに間に合わせる必要がある。よって時間に余裕のある 2 月に準備を行い、すぐにエントリーシートを提出できる体制を作っておいた。

これらの準備と並行して、夏の 4 社に加え、秋冬インターンでは 12 社参加した。企業研究や自己分析はすき間時間に行うことができたが、インターンは丸 1 日つぶれる場合が多く、大好きなテニスサークルの活動や友達と遊ぶ時間も制限することが増えた。多くの犠牲を払いながらも、これだけ私が就活に打ち込めたのは、「後悔のない就活をしたい。」という思いが強かったからだ。自分の優先したい条件を満たす企業を見つけること、さらに本命の企業に自分を採用していただくことは本当に難しいことだという危機感を持っていた。特にメーカーでは、全国で事務系の採用人数が 40~60 人であることが多く、「全国の大学生の中で、小学校の 2 クラス分くらいしか人数がいらないなんて狭き門すぎるやん！受かる気せんなあ。」と不安になることが多かったからだ。インターンに参加することで、企業に対し自分のことをアピールでき、少しでも不安要素を減らすきっかけになった。また、いろんな大学の就活生や企業の方に会ったり、様々なビジネスを知ることができたこと、自分の弱みを少しずつ克服し、自分に自信を持てたことで、充実した 3 回生の日々を送ることができた。

就活中のモチベーションの維持は大変難しいが、帰り道に梅田の美味しいケーキを買って帰るなど、うまく自分にご褒美をあげながらコツコツ頑張ることができた。就活中は財布の紐がかなり緩んだが（笑）

ついに 3 月 1 日、就活解禁日を迎えた。「ついに本番が始まる！内定もらえるかな。」そんな不

安もあったが、3年の6月から就活を行い、しっかり準備してきたので自信をもって臨めた。就活を始めた6月とは全く違う自分になっていた。そこからはトントんと進んだ。3月16日、E社（空調機器メーカー）の最終面接に行った。そして自分が思っていたよりもかなり早く1つ目の内定を頂けた。1つ内定を頂けたことで、その後の就活は心に余裕を持つことができた。

3月28日、A社の最終面接に進んだ。大好きな安室奈美恵の曲を大音量で聴き、気持ちの高ぶりを抑えながら、本社に向かった。本社ビルの最上階の厳格な部屋で面接は行われた。就活生4人と面接官3人の30分間のグループ面接は、人生で1番緊張した瞬間だった。冷や汗が止まらず、背中に電気が走るようなぞくつとする感覚が続き、声は震えた。そんな中、周りの就活生ははきはきと質問に答えており、焦りを感じた。「ここで自分らしさを出さないと落ちてしまう。最大限の力を出し切ろう。」秋から作成していた就活ノートによる自己分析や企業研究、新聞の切り抜きなど、入念に準備した甲斐もあり、他の就活生と差別化でき、人生1緊張した状況でも力を発揮できた。

翌日の夜、1本の電話がかかってきた。3年の夏インターンからお世話になっていたA社人事の方からの内定の連絡だった。入るのが難しいと言われていたA社からの内定をもらい、正直信じられなかった。「なぜハイレベルな学生がたくさんいた中で、私を選んでくれたんやろう？」嬉しい反面、不思議な気持ちになった。そしてそれと同時に、「私、ここが第一志望じゃない気がする、まだ就活を辞められない。」という思いが一気に湧いた。実は第一志望群は5社あったものの、本選考が始まって順位付けができず、受かってからすべて決めようと思っていた。喜ぶのも束の間、次の日から浮かれた気持ちを切り替えて淡々と努力することにした。

4月17日、G社（非鉄金属メーカー）の最終面接に進んだ。私が就職することを決めた企業だ。リクルーター面談が中心の選考であり、最終面接はリラックスして臨めたこともあり、その場で内定を言い渡された。その瞬間、「やった、嬉しい。」A社やF社から内定を頂いた時とは違う感情が生まれた。戸惑いが一切なく、素直に喜べた。今、振り返ると自分の中でこの企業が5社ある中で第一志望だったのかなと感じる。自分の優先する条件に合うかということも必要だが、“びびっ”とくる直感も大切だ。

4月19日、H社（重工メーカー）の内定も頂いた。幸い、私が強く志望していた第一志望群は、すべてインターンに参加していたこともあって早期選考が行われ、4月中旬までにすべて決着がついた。贅沢な悩みではあるが、この4社から1社に決める時間が一番つらく、苦しかった。

1か月間、毎日悩んだ。同期となる就活生、働いている社員さんやリクルーターの方、六甲台就職相談センターのYさん、両親、学部の友達、本当にいろんな人と話す機会を作り、考え続けた。多くの人にはA社に就職することを勧められた。しかし、気が進まない自分がいる。やはりメーカーに対する思いが強かった。おそらくA社に就職すれば、大きなステータスを得ることができる。しかし、私は働く上での「わくわく感」を大切にしたい。実際にG社のインターンで参加した工場見学を通して、モノづくりで世界を支える、そして次世代の最先端の技術を追求し、社会貢献を続けていくことの面白さを感じた。きっと働く上で辛いことがあっても、愛社精神が高い方がモチベーションになると思った。たくさん考えた末、最終面接で感じた直感を信じて、G社に決めた。残り3社に断りの連絡を入れるときは、たくさんお世話になった分、本当に辛か

った。しかし、3社とも私の気持ちを尊重してくれ、背中を押してくれた。涙が出た。この選択が正しいかどうか、誰も分からないけれど、精一杯頑張りたいと思った瞬間になった。

1年間の就活を通して、たくさんの時間を犠牲にし、体力的・精神的に大変なことも多かった。しかし、学ぶことの方が圧倒的に多かった。社会を知ること、そして自分自身を知って向き合うことができた。

私は人一倍の心配性であるがゆえに、計画的に準備を進め、コツコツと努力して成果を上げるタイプの人間である。しかし、時に自分の成果に対して周りから嫉妬され、悩み苦しむことも多かった。「なぜ自分で手に入れた結果に対して、嫉妬されなきゃいけないんだろう。間違ったことはしてないはずなのに。」いつしか自分が成果を上げるたびに、こんな感情を抱くようになり、あまり成果を外に発信したくないと思った。また、常に周りから期待されているように感じ、「期待に応えられなかったらどうしよう。」という気持ちになり、自分に自信がなくなってしまった。そんな学生時代を過ごしてきたが、就活を通して、大きく考え方を変えることができた。それは「社会は自分の頑張りを素直に受け止め、評価してくれる」ということだ。学生時代に頑張ってきたことに対して、企業が重視したのは、成果よりもプロセスだった。なぜ頑張れたのか、どんな取り組みをしたのか、といった自分の頑張りの過程と真剣に向き合っていたいただいた。これが私の自信にも繋がった。そして、周りの評価を気にするのではなく、自分らしく頑張りを続けることの大切さにも気づかされた。

「意志あるところに道あり」私が就活中に大切にしていた言葉だ。しっかり努力し、自分自身を見つめ改善していくことで、道が開けることを実感した。この言葉をこれからも信じて、社会人という新たなスタートラインを切り、精一杯努力していきたい。

最後になりますが、私は就活を通して本当にたくさんの人に支えられました。特に六甲台就職相談センター相談員のYさんとの出会いは、私の就活の大きなモチベーションになりました。感謝しかありません。人生の大きな選択となる就活、一人で抱え込まずに、周りの人を頼りながら、一步一步着実に進んでいってほしいと思います。

以上